「原文」　第一章　寒風新宿追分（おいわけ）

一

寒さに目を覚ました坂崎磐音は夜具（やぐ）の中で身を縮めた（ちぢめる）。すると腹の虫がくうっと鳴いた（なく）。

米も味噌もそこをついて二日が過ぎた。

（何とかせねば）

と煎餅（せんべい）布団の中で考えたが知恵は浮かばない。

明和（めいわ）九年は、この年の十一月十六日に安永（あんえい）元年（がんねん）に改元（かいげん）された。

理由は二月の目黒（めぐろ）行人坂（ぎょうにんざか）の大火（たいか）や相次ぐ凶作を振り払って、人心を一新するためであった。

だが、 深川（ふかがわ）六間堀（ろっけんぼり）の金兵衛（きんべえ）長屋（ながや）に独り住む坂崎磐音のもとには、明るい知らせは何も届かなかった。

（寝ていても仕方がない、起きよう）

そう決心した磐音は、夜具から這い出た。

ぴくりと肩の傷が痛んだ

一月前、両国橋（りょうごくばし）で天童赤司（てんどうせきじ）との闘争（とうそう）で受けた刀傷（とうしょう）はほとんど癒えていたが、ただひとつの稼ぎ、宮戸川（みやとがわ）の鰻割き（うなぎさき）の仕事に戻るにはまだ手が利かなかった。引っ掛かりがあり、微妙な感覚が戻ってこないのだ。

磐音は部屋の隅に夜具を畳む（たたむ）と手ぬぐいをぶら下げて井戸端（いどばた）に行った。すでに長屋の男たちは出かけていた。

九尺二間（くしゃくにけん）の金兵衛長屋に住人は、棒手振り（ぼてふり）や職人たちばかりで、浪々の身（ろうろうのみ）は坂崎磐音ただ一人だ。

「旦那、怪我はまだ治らないのかい」

水飴売り（みずあめうり）の五作の女房おたねが、亭主（ていしゅ）の黄ばんだ越中（えっちゅう）褌（ふんどし）を洗いながら聞いた。

「もう大丈夫だが、うなぎ割きは結構手先が敏感でなければならぬゆえ、あと三、四日はかかろうな」

宮戸川の鉄五郎（てつごろう）親方からは

「仕事はいいから朝餉（あさげ）だけでも食べにこなせえ」

という言付け（ことづけ）をもらっていた。

朝の間だけ一刻（二時間）から一刻半の鰻裂きで七十文（もん）の手間賃に朝餉、これが宮戸川との契約だった。だが、仕事はまだできないのに飯だけ食べに行くのも心苦しかった。

磐音は顔を洗ったついでに、腹の足に水を飲んだ。が、昨日から口にするのは水ばかりで、一口飲んでやめた。

「坂崎さん」

声に振り向くと、北割下水の貧乏御家人（ごけにん）の次男品川柳次郎が長屋の溝板（どぶいた）の上に立っていた。

「品川さん」

このところどちらも職に就いていてなかった。

顔を見れば、この日の首尾も推測がついた。

「磐音さんも腹一杯、飯を食べた様子はないな」

柳次郎さんはなんとも情けないことを言った。

磐音は、

「腹がたぶたぶと音を奏でて風流です」

と力なく笑った。

「呆れたね、お前さんたちには」

おたねが苦笑した。

二人は切迫感がないのは、独り身だからだ。

「これから内藤新宿に行きませんか」

「何ぞ仕事の口がありますか」

「それを探しに行くんです」

甲州（こうしゅう）道中の一つの宿、内藤新宿は、日本橋と高井戸宿の四里（り）の間に元禄（げんろく）十一年に開設された。だが、当時は人の往来や物産の流通も少ない上に飯盛旅籠（めしもりはたご）ばかりが繁盛したので、幕府は、享保（きょうほう）三年に廃止した。

その後、江戸の町の拡大に伴い、内藤新宿の重要性が増した。そこで、五十余年ぶりに再興（さいこう）されたばかりだった。

「半年前に内藤新宿の許しがでたというので、女衒（ぜげん）や博奕（ばくち）打ちたちがどっと入り込んで、遊び場所を建て、賭場（とば）を開いているらしい。御府内より仕事が見つけやすいと、仲間が知らせてきたんですよ。坂崎さんも同道しませんか。」

「深川から通えますか」

「二里はたっぷりありますから、通うのは無理でしょう。だが、坂崎さんも、俺も、当座の仕事が見つけないと飢え死に（うえじに）だ。ともかく、荒稼ぎ（あらかせぎ）の仕事を得ることです。」

品川柳次郎はあてがある様子で、何日か泊まりこみになると言った。

「今、支度します」

磐音は長屋にとって返すと古びた袴（はかま）を身につけ、備前包平（びぜんかねひら）二尺七寸と無銘（むめい）の脇差（わきざし）一尺七寸三分（ぶん）を腰に差した。すると久しぶりの大小（だいしょう）が腰に鉛でも下げたように重く感じられた。

空きっ腹で内藤新宿まで歩けるだろうかと、磐音の頭を不安がよぎった。

「おまたせしました」

柳次郎と肩を並べて木戸口（きどぐち）を出ようとすると。

「おや、二人して何ぞいい話かね」

と大家の金兵衛がどてら姿で立っていた。

「金兵衛どの、内藤新宿に仕事探しに参る。戻った暁にはきちんと家賃は支払いますぞ」

「内藤新宿といやあ、朱引（しゅびき）の外かね」

金兵衛は江戸市中の外かと言った。

「ちぇっ、内藤新宿は立派に朱引内だぜ」

江戸育ちの柳次郎が答え、

「大家どの、あてにしてていいぜ」

と言葉を継いだ。

「そんなとこまで行くこたないとおもうがね」

二人は金兵衛の言葉に見送られて、六間堀町からお籾倉の脇を通り、新大橋（しんおおはし）を渡った。

「食いませんか」

柳次郎は懐から紙包みを出して広げた。

白い粉を吹いた乾燥芋だ。

「おお、これはうまそうだ」

蒸した薩摩芋を乾燥させると糖分が増して、空腹の磐音には、（なんとも美味…）

だった。

「母上が拵えたんです」

柳次郎の言葉はいつになく優しく響いた。

「これでなんとか歩けそうだ」

新大橋を渡ると大名屋敷沿いに日本橋川へ出た。次いで御城（おしろ）に向かって西に進む。魚河岸（うおがし）を抜けて日本橋で東海道に入った。

若い二人の足が早い。

数寄屋（すきや）橋御門外から虎御門外、赤坂御門溜池（ためいけ）から四谷（よつや）御門と、城を右回りに半周して、四谷大通りに出た。

通りにそって町屋が薄く伸びて、その背後には御先手組（おさきてぐみ）の組屋敷などが広がっていた。そんな組屋敷からお店（たな）の小僧（こぞう）が風呂敷包みを背負って出てきたりした。

下級武士の家ではどこも内職をしていたために、小僧が羽子板（はごいた）の絵付き（えつき）仕事を集めて回っているのだ。

「体の具合はどうです、刀は遣えますか」

「三、四日前から、素振りはしています。引っ掛かりもなくなりましたから、もう大丈夫です」

「坂崎さんが頼りだからな」

柳次郎がぽつんと言った。

「何か仕事のあてがあるんですか」

「ここまで来たら、坂崎さんも嫌と言うまい」

磐音が柳次郎を見た。

「いえ、お上（おかみ）の定法（じょうほう）に触れるようなことではありません」

「なんです」

「まあ、喧嘩の助っ人（すけっと）です」

「助っ人？」

磐音が呆れて見た。

「４月に内藤新宿が再興されたについては、食売旅籠の主たちの要望がつよいんですよ。いえ、表立って、お上は食売の届を聞き入れてはくれません。そこで、駒場、四谷あたりに将軍家が御成（おなり）の時に御鷹（おたか）御用宿をつとめるという名目でお許しを終えたんです。むろん百五十人からの食売女が聞き届けられた裏には大金（たいきん）が動いています…」

柳次郎は事情に精通していた。

行く手（ゆくて）に大木戸が見えてきた。

「あの木戸口から下町、中町、上町と、東西九丁十間、南北一丁足らずが新宿です。中町に太宗寺（たいそうじ）があるんですが、この門前の縄張りをめぐって、四谷大木戸の金貸し（かねかし）の黒木屋左兵衛と上町の渡世人（とせいにん）の新場（しんば）の卓造が張り合っていましてね、双方が助っ人を集めているのです」

「喧嘩になりそうなののですか」

「さあね、私の勘では血の雨が降るほどの出入りにはならないでしょう」

磐音と柳次郎は元和（げんな）二年に設けられた大木戸に差し掛かった。もともと、大木戸は江戸城下への入り口という意味だから、金兵衛がその外の内藤新宿を朱引の外というのも間違いではない。

道の両側に石垣が積まれ、番屋があった。辻駕籠が客待ちし、馬が荷を積んで往来していた。

「うろんなものたちを宿場にあつめるのを、お上がよくだまっておられますか」

「坂崎さん、そのうろんなものがわれらです」

「そうか、そうでしたね」

「こんなことでもないと一日二文はもえません」

「えっ！一日二文にもなるのですか」

「左兵衛と卓造の双方が腕のいいものを競い合って、手間賃が二文まで高騰したと、新八がしらせてきたのです」

安東新八は柳次郎同様、貧乏御家人（ごけにん）の三男坊で、磐音とも知り合いだ。

「安藤さんはどちらについておられます」

「新場の卓造一家に身を寄せているそうです」

「我らもそちらに参りますか」

「まずは様子を見てみましょう」

二人の行くとおりの左右では、旅籠なのか、大工（だいく）が入って仮普請（かりぶしん）のところもあれば、すでに食売女が格子もない板の間から手招きしているところもあった。

宿場の中程（なかほど）に普請中の建物は、どうや本陣と脇本陣のようだ。

もともと甲州道中を利用する参勤交代（さんきんこうたい）の大名家（だいみょうけ）は、内藤新宿のいわれになった高遠藩（たかとおはん）内藤家、飯田藩（いいだ）、高島藩と限られ、あとは甲府勤番や八王子千人同心くらいだった。それが立派な本陣が作られていた。

「どいたどいたどいたっ」

飛脚（ひきゃく）が走り、犬が吠え、女達が作り声で呼びかけ、物売りの売り声が響き、馬が音を立てて小便をしていた。

猥雑（わいざつ）で喧しい（かまびすしい）が、いままさに開拓されようとする新しい宿場の息吹（いぶき）が感じられた。だが、新宿を巡って２つの勢力が争い、刃傷沙汰（にんじょうざた）になりそうな雰囲気は感じられなかった。

「この辺のはずだがな」

柳次郎は、新場の卓造一家の根城の旅籠をきょろきょろと探した。すると二十畳ほどの板の間（いたのま）から女が呼びかけた。

「ちょいと様子のいいお侍さん、昼遊びしていかないかい」

厚化粧（あつげしょう）の大年増（おおどしま）だ。

「姐さん、それより、新場の親分の旅籠を知らないか」

「何だ、用心棒に雇って（やとう）もらおうという文無し（もんなし）かい」

「稼いだらお前らを総揚げにするぜ」

「けっ」

と吐き捨てた食売女んが手で床を指した。

「何だ、ここが卓造親分のところか」

「用心棒ならたっぷりいらあ。頭下げても断れるのが落ち（おち）さ。

「遅かったかな。姐さん、安藤新八という侍がいるはずだ、呼んじゃくれまいか。」

柳次郎が懐に残っている乾燥芋を年増女（としまおんな）に差し出した。

「なんてこった、芋で女を釣ろうとしてやがるよ」

「懐に銭など一文もないんだ、芋で我慢してくれ」

女は芋を包みごと引っ手繰る（ひったくる）と。

「あの侍ははじき出されたよ」

そのとき、玄関先で、

「親分、いってらっしやいまし」

という呼び声がして、縞の羽織を着たお太りの男と痩身（そうしん）の剣客が通りに出てきた。お太りの男が新場の卓造らしい。

二人は子分（こぶん）たちに見送られて中町に歩いて行った。

「神道無念流（しんとうむねんりゅう）の三浦夕雲（せきうん）先生が用心棒の腕試しをされて、からっきし駄目のやつは掃き出されたのさ。あんたの仲間はその中でも一番だらしなかったよ。」

「なんてこった、わざわざ深川くんだりから遠出（とおで）してきたというのにな」

柳次郎ががっくりと肩を落としたが、

「姐さん、新八がどこいるかしらないか」と聞いた。

「天龍寺門前の茶店で使い走りをしていたよ」

柳次郎が小さな声で礼を言い、

「坂崎さん、あてが外れた、済まない」

と謝った

「気にすることはありません。新宿を見物に来たと思えばいい」

磐音がのんびりと答えると言った。

「安藤さんの顔を見に行きましょうか」

「あいつの顔を見ても一文になりませんよ」

そういうながらも足を天龍寺に向けた。

天龍寺がもともと駿河（するが）の掛川宿にあったものだ。

それが家康の江戸入国に従い、天和三年に江戸に移り、火事にあって新宿の地に山門を直し構えた。

天龍寺の名物は明和四年に笠間（かさま）藩主が寄進（きしん）した時の鐘で、甲州道中谷保村（やほむら）の鋳物師（いもじ）孫兵衛（まごべえ）が作った。江戸の三名鐘（しょう）のひつとであった。

二人は天龍寺の門前に佇み（たたずむ）、どうしたものかと思案していると、

「柳次郎」

と鐘つき堂（かねつきどう）から声がかかった。

二人が見上げる戸安藤新八が箒（ほうき）を手に立っていた。

「寺の本堂の下に止まりさせてもらう代わりに、境内（けいだい）を掃き掃除（はきそうじ）する約束なんだが、あまりにも広くて小憩（しょうけい）していたところだ」

安藤新八はそういうと箒を投げ出して石段を下りきた。

「坂崎さん、よく来られました。これで助かった。」

「何助かっただ。俺たちはお前をあてにわざわざ深川から新宿**くんだり**まで遠出してきたんだぞ。それが追い出されただ戸…」

「柳次郎、そういうな、わけもあるんだ」

そういった新八は、

「坂崎さん、腹が減っていませんか」

と訊いた。

「新八、飯を食うあてがあって、聞いているんだろうな」

磐音が答える前に柳次郎が詰問（きつもん）した。

「まあ、任せておけって」

新八が二人を門前町の裏通りの奥に連れてこんだ。するとそこには掘っ建て小屋が櫛比（しつぴ）して、女達が狭い路地で洗濯したり、男たちが所在なげに無精髭（ぶしょうひげ）の生えた顎を撫でたりしてた。一帯（いったい）になんともいえない異臭が漂っていた。

「おばば、おるか」

新八が戸の代わりの筵（むしろ）を捲って顔を突っ込み、声をかけた。ぼそぼそとした返事が漏れると、新八が二人にどうぞと笑い、筵の向こうに姿を消した。

本所深川の胡散臭い（うさんくさい）場所を熟知（じゅくち）している柳次郎も二の足（にのあし）を踏みそうになった。

「後学（こうがく）のためです、はいりましょうか」

磐音がおっとりと笑いかけ、柳次郎も覚悟を決めて筵の奥に入った。するとそこに三畳ほどの板の間が広がり、天井の一角に開けられた穴から薄暗い明かりが落ちていた。

部屋の奥には間仕切り（まじきり）、向こうに老婆（ろうば）が一人いた。

「酒と、何ぞ食うものを出してくれぬか」

老婆がにゅっと手を出した。

「きょうは持っておるぞ」

新八が薄汚れた縞の財布から何がしかの銭を出した。

それを受け取った老婆が、縁（ふち）の欠けた徳利（とっくり）と茶碗を３つ寄越した（よこす）。

「食べ物もおいしいですよ」

新八は慣れた様子で、徳利から濁り酒（にごりざけ）を３つの茶碗に注ぎ分けた（つぎわける）。

「坂崎さんの快気祝いだ」

新八はそういうと茶碗に口につけた。

鄙びた（ひなびる）酒の風味が舌から喉に広がった。

柳次郎はごくりと喉を鳴らして飲み干し

「ふうっ」

と一つ息を吐いた。

二

「事情を話せ」

柳次郎が新八に命じた。

「新場の卓造と黒木屋左兵衛が角突き合わせているのは、内藤新宿の飯盛旅籠を牛耳ろう（ぎゅうじる）という魂胆（こんたん）の他に、太宗寺（たいそうじ）の末寺（まつじ）、地蔵院（じぞういん）で開帳する賭場の権利に巡って争っているからだ。地蔵院では、卓造と左兵衛の二人を競わせて、寺銭（てらせん）を吊り上げようとしている。

「坊主（ぼうず）め、欲深いな」

「それで、四谷あたりの御家人を十五、六人揃えている。頭分（かしらぶん）は根来（ねごろ）百人組組頭の大村陵角という男だ。」

根来百人組とは御鉄砲衆だが、平時の今は大手三の門の番士を務めていた。三十俵三人扶持（ふち）から十五俵二人扶持の小禄（しょうろく）で、内藤新宿裏の組屋敷に住んでいた。

幕府の下級武士である百人組は貧乏の別称ともいえた。

根来衆も共同の敷地、大縄地（おおなわち）の空き地を利用して、女達が内職の躑躅栽培に精を出し、江戸の名物になっていたほどだ。

だが、女達の内職だけでは暮らしが立たず、根来衆は戦闘集団の腕前を町人（ちょうにん）に売る稼業（かぎょう）に手を出していた。

幕府もご奉公に差し支えなくばと黙認した。

「新場では渡世人を二十人ばかり集めたが、根来衆の黒木屋の方に分（ぶ）がある。そこで、熊野十二社（じゅうにそう）で怪しげな道場を開く、神道無念流の三浦夕雲（せきうん）を連れてきたというわけだ。」

「で、新八は腕試しでは練られたのか」

「乱暴な野郎で、腕をおられたものも出た。だから俺は、徹底的に逃げまわって、わざと追い出されるように仕向けたんだ。まともに立ち合えば、間違いなく残れた」

新八は虚勢を張ってみせた。

「どうだかな」

「柳次郎、俺は本気で喧嘩の助っ人をする気はないんだ。そこそこに銭が稼げればと内藤新宿に来た。それがどうも新場と黒木屋は本気でぶつかる気配だ。命あっての物種（ものだね）だからな」

「おまえは両派（りょうは）をやめようとはなさらないのですか」

磐音が訊いた。

「そこなんです。噂では町奉行所（ぶぎょうしょ）が両派を煽って戦わせ、互いを自滅させようと狙っているというのですがね。そこまではどうも疑わしい。

新八は頭を捻った。

新八さん、という老婆の声がきた。

丼（どんぶり）に盛られた煮物が出てきた。

「新八、こりゃなんだ」

柳次郎が鼻を摘んだ（つまむ）。

「うさぎの肉だ、結構いけるぞ」

おれはいい、と柳次郎が手を振った。

「いただこう」

磐音が箸で摘むと独特な香りが鼻穴（びけつ）を刺激して、口に入れると肉汁（にくじる）がいっぱいに広がった。

「おばばどの、これは美味しいな」

国の豊後（ぶんご）関前ではいのししの肉も野兎（のうさぎ）も食べた。

老婆が声もなく笑った。歯が一本もなかった。

「坂崎さんが来れば鬼に金棒だ」

新八は兎の肉をくちに放り込んで言った。

「新八さん、それがしがみた宿場は一触即発（いっしょくそくはつ）という雰囲気ではなかったが」

「昼と夜では内藤新宿が一変します。両派が小競り合い（こせりあい）をやった後があちこちでみられますよ。**死骸だって転がってる始末です。**天龍寺の４つの鐘がなった後が見物です。」

新八が嬉しそうに言った。

柳次郎が磐音の顔を見た。

「ここまできたんです。もはや手ぶらで深川に帰るわけには行きませんよ」

柳次郎が頷いた。

「ただ、両派ともに人数を揃えて、新たに人を雇っていないんだ。それに勢力が拮抗（きっこう）して膠着（こうちゃく）状態で、**親分たちがなんと言おうと見まわり組は怪我人がでるようなぶつかり合いは避けている**」

「見廻組は新宿を巡視するのですか」

磐音が訊いた。

「ええ、両派は見回りを出して、うちの縄張りだとそれぞれが主張してるんですよ」

「どっちが金の払いはいい」

柳次郎が訊いた。

「飯は黒木屋、女は新場って噂が流れていたが、払いはどちらもちょぼちょぼかな」

「とにかく夜を待ちましょうか」

と言った磐音は、

「おばばどの、飯をいっぱい恵んでくれぬか」

と頼んでみた。

老婆は磐音の顔をじっと見ていたがこくりと頷いた。

天龍寺の時の鐘が４つを打った。

新場の卓造の飯盛旅籠甲州屋から七人の見回り組が出てきた。

先頭の男が新場組と書かれた提灯（ちょうちん）を下げていた。

五人のヤクザの中には長脇差（ながわきざし）に竹槍を携えて（たずさえる）いる者もいた。

二人の浪人者は擦り切れた（すりきれる）袴（はかま）の股立（ももだち）をとっていた。

一行（いっこう）は上町から中町へと下り、太宗寺の門前を過ぎたところで左に折れた。すると急に辺りが暗くなって、先頭の男が持つ提灯の明かりに頼りになった。

「竹、気をつけろ、この前はいきなり提灯持ちが襲われたからね」

「兄い、脅かしっこなしだぜ」

竹と呼ばれた子分が足を止めた。

「今夜は倉田と相原の旦那がついておいでだ、心配ねえよ」

「先生、おれの脇に来てくんな」

竹が泣きついたので、浪人者が提灯持ちの傍らに来た。

一行は再び進み始めた。

地蔵院の門前では別の明かりがちらちらしていた。

「兄い、黒木屋だぜ」

二つの明かりは賭場に予定されている地蔵院の門前で鉢合わせ（はちあわせ）した。

「黒木屋、ここはおめえらの縄張りじゃあねえ。さっさと四谷に下がりやがれ！」

「なにおっ、地蔵院の和尚（おしょう）からうちの旦那がよろしくと頼まれてるんだ。おめえらこそ、尻をからげて（絡げる）とっとと飯売り宿に帰りやがれ！」

鉢合わせした二組の兄上株が罵り合った。

だが動く気配はない。

「こりゃ、喧嘩には程遠いな」

磐音の傍らから柳次郎がつぶやいた。

三人は、両派が**数間**おいて対峙するさまを地蔵院の前の空き地から見ていた。

「柳次郎、そうなんだ。親分がなんと言おうと、出先では怪我人を出してまで本気でぶつかる気はないんだ。日当を稼げればいいんだからな」

「ちぇっ！見物にもならねえな」

柳次郎がぼやき、磐音に言った。

「坂崎さん、何か知恵がないかな」

「そうですね、私達も生計（たつき）がかかってますからな」

磐音は懐に手ぬぐいを出すと頬被り（ほおかぶり）をした。

近くにあった三尺（さんじゃく）ほどの棒を手に、一旦暗がりに姿を没した（ぼっする）。

「ああっ！」

という悲鳴が上がったのは新場の後ろからだ。

「黒木屋め、別働隊（べつどうたい）を隠してやがるぞ！」

新場に動揺がおこり、それに乗じたように黒木屋一派（いっぱ）が襲いかかった。

両派が入り乱れて（いりみだれる）衝突した。

今度が黒木屋の一角から悲鳴が上がった。

「ああうっ」

「ぐえっ」

衝突する両派の間に一陣（いちじん）の突風（とっぷう）が吹き荒れて（ふきあれる）、棒が振るわれる（ふるう）たびに一人二人と手を抱え、足を打たれて倒れていた。

今度は新場が勢いづいて押し込んだ。

「やれ、この際だ。徹底的にたたっ斬れ（たたっきる）！」

磐音は再び闇に溶け込んだ。

しばらくすると

「町方のお出張りだぞ」

という叫びが起こった。

「やばい、にげろ」

「くそっ、ひけひけっ」

兄上株がそれぞれ声を張り上げて、両派は左右に別れると後退していった。

「こんなものかな」

暗がりから磐音が姿を見せて、頬被りをとった。

「俺たちを売り込めるかな、坂崎さん」

「まあ、明日にはわかりますよ」

「仕方がない、今夜は天龍寺の床下に寝るか」

文無しの三人は地蔵院から立ち去った（たちさる）。

四谷大木戸の黒木屋はもともと辻駕籠屋だった。それが内藤新宿の廃止に伴い潰れて、先代が御家人（ごけにん）などを相手に小金貸しを始めていた。今でも辻駕籠の暖簾（のれん）を掲げた（かかげる）店の裏で、本業になった金貸し（かねかし）をしている。

坂崎三人が黒木屋の店の表に立ったのは昼前のことだ。

くうっ

と磐音の腹の虫が鳴き、それが柳次郎にも移った。

よし、と覚悟を決めた磐音が暖簾を跳ね上げた。柳次郎も新八も続いた。

「ごめん」

辻駕籠がもともとの商い（あきない）だっただけあって、三和土（たたき）は広々していた。

**隠れ金貸しをしているお上への言い訳か**、長いこと使われていない駕籠が天井の梁（はり）にも吊るされ（つるす）、数挺が土間（どま）の片隅に置かれてあった。

磐音が声をかけたが、奥から怒声が響き渡っているものの、誰も出てこようとはしなかった。

「あんたたち、それでも根来衆か。ええ、相手はやくざ者じゃないか。半端者（はんぱもの）相手に侍が四人も五人も手を折られた、足を怪我しただと。その上、治療代をよこせとは了見違い（りょうけんちがい）もはなはだしいいんじゃないか。お前さん方には三年先の扶持まで貸してあるんだ。**ちったあ**、働け！」

黒木屋左兵衛怒鳴り声だった。

「黒木屋どの、相手にもそこそこ怪我は負わせた」

「それに、なんとも強い野郎が一人加わっていてな、つい油断した」

ぼそぼそとした声の二人が言い訳をした。

「ごめん！」

柳次郎が声を張り上げた。奥座敷（おくざしき）まで届いたか、奥から足音が響いてきた。

「なんですね」

番頭風の男が磐音らを見た。

「こちらで人を雇っておられると聞き及んでな、御府内から出て参った。」

柳次郎が要件を述べた。

番頭はジロジロと三人の風体（ふうてい）を見ていたが、

「旦那！」

と奥へ声をかけた。すると蚊とんぼのように痩せて顔色の黒い男が長羽織をだらしなく着た姿を見せた。根来衆か、頭分らしい男と手下が二人ばかり従っていた。

「用心棒にやとってくれですと」

左兵衛が手を振った。

「種蔵さん、何を言ってるんだね。代わりは組屋敷からいくらでも連れて来られるじゃないか」

と言うと奥へ引っ込もうとした。

「あいや、しばらく。我らは少々腕に自信がござってな。神田三崎町の直心影流佐々木玲圓道場の免許持ちでござる。」

品川柳次郎は勝手に磐音の師の名まで持ち出し、それも誇張して言った。

「なにっ、佐々木道場の免許持ちだと」

根来衆を率いる与力（よりき）の膳所（ぜぜ）三五郎が柳次郎を睨んだ。

「嘘であるまいな」

柳次郎が胸を張ったとき、

「おまえは新場を追い出された腰抜け（こしぬけ）侍だな」

と番頭が安藤新八を睨んだ。

「なにっ、こやつら新場を追い出されてうちに売り込みに来たか」

「いや、それは」

柳次郎が狼狽した。

左兵衛が奥に入りかけようとした時、膳所が昨夜の汚名（おめい）を返上しようと考えたが、

「黒木屋どの、こやつらをこのまま返しては、あとあと増長する者が続く事になる。叩きのめして追い返そうな。」

というと三和土（たたき）に飛び下りた。

柳次郎はするりと後退して磐音と代わった。

その磐音がのんびりと訊いた。

「黒木屋どの、我らが試し試合に勝てば雇ってもらえるかな」

足を止めた蚊とんぼの金貸しが黒い顔を向けて、

「膳所さんは根来伝来の剣の遣い手、おまえさんが勝てば、考えてもいいが」

「三人でいくらいただけるかな」

磐音の後ろから柳次郎が訊いた。

「新場から追い出されたクズと一緒なら、三人で一日一両が相場だ。」

「渋いな」

柳次郎が応じた。

「うるさい！そなたらが黒木屋に雇われる心配はないわ」

膳所がいきなり剣を抜き、上段に振りかぶった。

真剣勝負になった。

「では…」

磐音は備前国の鍛冶（かじ）が鍛えた大包平（おおかねひら）をぬいて峰に返した。

「おのれ」

それをみた膳所三五郎の眉間（みけん））に青筋が浮かび上がる。

磐音は峰に返した剣を右前に、切っ先（きっさき）を地面に下げた。

「いつでも」

磐音の声がのどかに響いた。

磐音の構えを

「…春先の縁側（えんがわ）で日向ぼっこ（ひなたぼっこ）をしている年寄り猫のようじゃ。眠っているのかおきているのか、まるで手応えがない。こちらもつい手を出すのを忘れてしまう。居眠り磐音の居眠り剣法（けんぽう）じゃな」

と評した。豊後関前藩の城下（じょうか）で道場を開く師匠の中戸信継だ。

磐音は神伝一刀流を幼き折りから修業した後、江戸に出て佐々木玲圓道場に入門し猛稽古（もうげいこ）に耐えて、目録を得ていた。

この佐々木道場の目録は、他の道場の免許皆伝に匹敵すると言われていた。

ともあれ、佐々木道場の修業でも居眠りの剣風（けんぷう）は変わらなかった。

一見、構えがゆったりして緊張がないように見受けられる。

膳所三五郎も磐音をそう見た。

「おのれ、女剣法か」

上段の剣は背につけんばかりに反り返らせ、踏み込みざま、一気に磐音の眉間に振り下ろした。

春風がそよと吹き抜けた。

磐音がふわりとまえへ出たのだ。出ながら、峰に返した剣を擦り上げ、大きく振り下ろされてくる膳所の剣を

パーン

と軽く弾いた。すると膳所のてから剣が飛び、天井の梁に吊るされた駕籠に突き立った。

「うっ」

立ち竦んだ（たちすくむ）膳所三五郎は慌てて脇差の柄（つか）に手をかけた。

中腰（ちゅうごし）のままだ。

春風が旋風（つむじかぜ）に豹変（ひょうへん）した。

磐音が振り向きざまに振り上げた大包平が、膳所の肩口（かたぐち）を鋭く襲った。

峰に返された二尺七寸の豪剣がぴたりと肩に止まった。

中腰の膳所三五郎が腰砕け（こしくだけ）にずるずると三和土にへたり込んだ。

ぱちん

と乾いた音を立てて大包平が鞘に収められた。

「よし、雇う」